

〔一〕 次の文章は、昭和十九年に中国文学者吉川幸次郎とドイツ文学者大山定一が発表した往復書簡の一部で、吉川幸次郎の返信である。これを読んで後の間に答えなさい。(字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。)

僕は、文学の研究と、文学の創作とは、別事であると考えます。文学とは何か。僕の定義は、甚だ簡単でありまして、人を悦ばしめる文字であります。

簡単きわまる定義ではありますが、僕は固くそう信じて疑いませぬ。氷水の喩えは、そうした人を悦ばしめる文字の発生する状態をいうものとして、誠に妙喩であります。僕の近頃の考えを申し述べれば、詩とは、そこに居すまう言葉の数数が、数数の言葉なるが故に複雑でありつつ、しかもそれぞれ居すまうべき位置に居すまうて、完全な静謐の状態にあり、而して完全な静謐とは、この天地が究竟においてもつ静謐、それと同じ静謐にあり、といつてそれは、その静謐が、天地の静謐の象徴であるというような消極的な事態ではなく、ほかの何物かが飛び込んで来ても、それを自ずからの静謐に従わせて、あるべき所に居すまわせるだけの力、しかもその力はみずから働きかけるのではなくして、己れはあくまで黙して他をおのずからにして従わしめる力、しかもその力強さは、その力強さの故に、闖入者の無限を予想させざるを得ぬ力、従つてまたかく無限に飛び込んで来るものがすべて居すまうべき所に居すまうことを予想させる力、つまりそうした形で世界をホウセツする力、そうした力ある静謐の状態、それが詩であり、文学であり、つまり僕のいう人を悦ばしめる文字であります。そうした静謐の成立の爲には、言葉の淡くして少なきをよしとする見方もありましょうし、言葉の濃厚にして多きこそ、静謐の力を大にするという見方もありましょう。

(2) 文学の研究とは、こうした人を悦ばしめる文字が、何ゆえに人を悦ばしめるか、つまり水が氷になる瞬間の如きものを、なぜそれらの文字はもつか、なぜそれらの文字は、僕のいう如き静謐を形づくり得ているか、乃至は形づくり得ていないか、或いは形づくるとして見えて実は形づくっていないか等等、人間の文学活動の間に存する理法を研究する学問であると考えます。つまり人間の文学活動を対象とするものではありませんけれども、そのこと自体は、人間の科学活動の一部をなすものであります。なお文学は言

語を素材とする芸術である以上、文学の研究は言語の研究から出発すべきことという迄もなく、但し、語学の研究とは、方向を異にします。

A、文学の創作とは、申す迄もなく、人を悦ばしめる文字を自ずから作ることであります。僕はこの二つは、はつきり別事であると考えます。B、この二つのいとなみは、一人の身の上で双方を兼ねることが、出来ぬではありません。

儒林と文苑と、共に位地ありとは、中国で通儒をほめる言葉として、^(イ)常套のものであります。また事実としては、すべての人が、文学のことに携わるすべての人が、何ほどの割合で、双方を兼ねていてあります。

文学研究者は、創作を試みる必要なしと申すものではありません。いなむしろ僕は、^(イ)属文の事は文学研究者にとつて必須の修業であると考えます。学は必ず心得しんとくに出づべく、心得の道は体験のほかにはありません。

C、かく、文学の法則の究明に従う学人が、属文の事を試みるのは、手段としてである、と考えます。D、

創作の意欲を満足する為ではなく、創作の意欲の満足とは、いかなることであるかを、わが身の上に味わつて見て、⁽⁴⁾その法則の究明に資せんが為であります。これは、忠実なる学者に取つては、必須のEであります。しかし必須とはいえず、Fであります。Gではありません。もとより創作ということとは、それ自体人間活動の一つとして、尊重すべきものであります。しかし、学術もまた尊敬さるべきであります。学術を尊敬するものに取つては、創作さえもHであります。

翻訳とは、単なる文学の研究ではありません。創作の作用を必ず伴わねば成立せぬものであります。また外国文化を単に研究するという態度ではありません。自国の読者に与えるものである以上、単なる紹介の意図以上に、移入の意図をも伴い得るものであります。しからば、そこには様様の翻訳の姿があり得るわけでありまして、森鷗外、二葉亭四迷のような翻訳もあつてよろしいわけであります。僕は決してそのような翻訳の存在を否認しません。それはそれで存在の理由があります。それによって日本の文学を高めようという意図のものである以上、或いはもとの存在に日本的選択、日本の変貌を加えていようとも、それによって日本の文学が高まつたとするならば、これは日本の文学の為に、貴ぶべき業績であります。また両家の翻訳は、文学研究の意欲よりも、文学創作の意欲が、より多く作用してあります。翻訳によって創作をなすということは、創作の業が何か必ず素材

を必要とする以上、大いに可能なことであり、そうした態度の下にされる翻訳は、たとい素材本来の形に変貌を加えていても、^(ウ)キヨウヨウされるべきでありましょう。

しかしながら、それは学人の翻訳ではありません。文人の翻訳であります。学人の翻訳は、それとは道を異にすべきではありません。それは真実の掩蔽^{*えんぺい}を悪む精神^{にく}が、すみずみ迄もみなぎり渡つたものでなければなりません。原文の包含する限りのものを、縦にも横にも探索し尽した上、原文のもつだけの観念を、より多からずより少なからず伝え得べき国語に定着させたものでなければなりません。いや、観念といったのは狭隘^{(5)きょうがい}でありました。広く原語が帯びるだけのものを、つまりもとの言語がその言語の世界の中で象徴せんとするだけのものを、同じ比率で国語の世界で象徴し得る国語、それを探索することではなければなりません。完全にそうした役目を果し得る国語は、あり得ないということも出来ましょう。しかしそれをほぼ完全^(エ)にハたす国語は、いかなる場合でも、必ずあると、僕は僕の経験から、ほぼ確実に出ることが出来ます。

つまり僕のいう翻訳とは、二つの民族の言語という矛盾した存在の中に、統一した方向を見出そうとする努力であります。僕は剣を学んだことはありませんが、剣を取って敵に向かった時の気持ちは、およそ想像がつかえます。訳語を思いつめた時の気持ちは、ほぼそれに近いと信ずるからであります。訳語を思い当った時、僕の感ずる喜びは、この世界には統一したものが流れていることを確め得た喜びであります。かくして思い当った訳語が、音声的にも原語との類似、ことに多くは子音の類似を示すことがあるのは、面白いことであります。近頃ではそれを逆用し、訳語をさがしあぐねた時には、まず音声の類似した国語を擬して見たりしています。

⁽⁶⁾僕の考える翻訳とは、以上の如きものであります。従つて日本の読者には、こう訳す方がわかりやすかろうという意識は、押さえらるべきであります。少くとも一応は押さえらるべきであります。またこの意識を抑えることがわかりやすい訳語に到達する道のようにあります。原語の表現せんとする事態をびたりと表現する国語、それはその事態を現わす国語として、最もわかりやすいものであるに相違ないからであります。

かく僕が翻訳における日本の歪曲^(オ)をきらうのは、単に真実の掩蔽を悪むからばかりではありません。こうした傾向は、⁽⁷⁾日本人の

^{*} Lieblichkeit によつて生まれ、逆にまた日本人の Lieblichkeit を強めるものと考えられます。Lieblichkeit は、日本人の ビ トクの一つであり、おそらくは、「可憐さ」という訳語の外貌にも似ず、国力の一つの基礎ともなるものでありましょう。しかし現在の国家に最も必要なものは申す迄もなく科学性です。断じて Lieblichkeit ではありません。そもそも学人の翻訳とも文人の翻訳とも、^{*} 途徑を認めせず、従つて 日本 的演繹でも何でもなく、ただの誤訳にすぎぬという翻訳が横行しているのは、まさしく Lieblichkeit 過剰の弊であります。

使う人、使う場合によつて千差万別、一一に意味を異にする言葉、それがどの辺にさまよい、落ちついているか、それを測定するのが、文学研究の道であり、そうした測定を可能にするのは、言葉の使用者、すなわち話者の心理を洞察することによつてのみ可能である。つまり文学の研究というものは、言語を資料とする人間学でなければならず、そうした人間学としての言語研究が行われてこそ、はじめて翻訳は可能であります。つまりまず、原文を、本当の意味で読むのでなければなりません。

一体外国の事情の一端を知っているだけで、外国語が読めるものでありましようか。僕はむしろ、その民族のこと全般を知っているのだから、一語たりとも、外国語が完全に読めるわけではないと考えるのであります。ただ一つの言葉さえも、それを読むには、その背後にひそむその国、その民族の精神を、而して理想的には精神の全貌を知っているのでなければ、読めない筈です。

私は西田先生の著書のかずかずを、ほとんど読んだことがありません。ただいつか何か随筆の中で、「ものともものが無限に密接に連なりあっているのが、この世界の形である」という意味のことを書いていられたのは、僕の頭を去りません。先生の哲学の全貌に通じない僕は、或いは先生のこの言葉を断章取義して、自己流に解釈しているかも知れません。しかし一つの言葉の背後に無限のものが密接につらなりあっているのは、事実のようであります。本を読むとは、すなわちこの無限のものをたぐりよせることであり、またそれをたぐりよせ得る人でなければ、本は読めない筈です。⁽¹⁰⁾ こうした真の「読」の結果、それを国語に定着させたものが、僕のいう翻訳であります。

(大山定一・吉川幸次郎『洛中書問』による)

注 * 氷水の喩え||ここでは水が氷になるように、物事がことばによって表わされることの喩え。

* 究竟||物事の究極、最上のところ。

* 闖入者||突然、無断で入り込む者。

* 通儒||古今に通じた博識の学者。

* 属文||文章をつづること。

* 掩蔽||覆い隠して見えなくすること。

* *Liebllichkeit* ||可愛らしさ、愛らしさを意味するドイツ語。

* 途徑||筋道。

* 西田先生||西田幾多郎(一八七〇~一九四五)。「純粹經驗」による「真実在」の探究で西洋の哲学者にも影響を与えた哲学者。代表的な著作に『善の研究』『哲学の根本問題』がある。

問一 傍線部(ア)(ウ)(エ)(カ)の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部(イ)(オ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問三 傍線部(1)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 限りなく淡泊で透明な言葉で綴られた文章が饒舌であっても決して濁ってはいない、どこまでも清澄な状態。

ロ ほかの言葉が侵入してきても自らのものとし、言葉の数数がしかるべき姿に収まっている状態。

ハ 純度の高い水が凍りつく時に発生する分子と分子との衝突音が、極限の中で相殺されたひそやかな状態。

ニ 外部からの侵入の圧力と内部から外部を制圧しようとする力が拮抗する、音のない緊迫した状態。

問四 傍線部(2)を筆者はどのようなものと捉えているか。文中より二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五 空欄A～Dに入るべき語句として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号をマークしなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはならない。

イ しかし □ むろん ハ いいかえれば ニ ところで

問六 文脈に基づいた傍線部(3)の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 文学の創作と翻訳活動のバランスは、学者に必要な条件である。

□ 思想の究明と文学表現のバランスは、学者に必要な条件である。

ハ 科学研究と文学研究の両方にしかるべき能力を保持している。

ニ 文学研究と文学創作の両面においてしかるべく評価されている。

問七 傍線部(4)はどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 創作意欲の源の究明に役立てるため □ 創作手段の究明を準備するため

ハ 文学の理法の解明に役立てるため ニ 文学が人々を悦ばせる理由を解明するため

問八 空欄E～Hには、「手段」と「目的」のいずれかが入る。手段が入る場合はイ、目的が入る場合は□の記号をマークしなさい。

問九 傍線部(5)の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 考えが限定的であること □ 思考が貧弱であること

ハ 発想が独りよがりであること ニ 想像力が欠如していること

問十 傍線部(6)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 文学の研究の成果を踏まえ、創作の要素を徹底的に排した国語を選び出すこと。

ロ 二つの民族の言語に存在する矛盾を統一させるために適切な訳語を探し求めること。

ハ 経験上この世界に必ず存在する類似の音声言語を用いて訳語を見出すこと。

ニ 原文がその言語の世界で象徴するところを過不足なく表現する国語を探索すること。

問十一 傍線部(7)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 読者の理解を促す工夫に熱中する余り、周囲との協調を最優先させてしまう性質。

ロ 相手に対して配慮する余り、安易に妥協して科学的な思考を欠いてしまう性質。

ハ 一人でも多くの人に理解してもらえよう日々努力を重ねる健気な性質。

ニ 真実の究明には価値を置かず、大多数の人々の理解の一致を重視する性質。

問十二 傍線部(8)とあるが、作者が「日本の演繹」と考える翻訳とはどのようなものか。「日本の変貌」という語を用いて三

十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

問十三 傍線部(9)「断章取義」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 他人の著作の全ての章から自分に必要な部分を切り取って持論に援用すること。

ロ 他人の著作の構成を一旦バラバラにして自分なりに組み立て直して理解しようとする事。

ハ 他人の著作の一部を元の文脈を無視して切り取り自分に都合のよいように解釈すること。

ニ 他人の著作に自説と相容れない部分があることを黙殺して一致する点にのみ意義を見出すこと。

問十四 傍線部(10)とあるが、作者が考える真の「読」とは何か。「背後」という語を用いて二十字以上三十字以内で説明しな

さい。

〔二〕 次の甲・乙は中国戦国時代の思想家である莊子（紀元前三六九年頃～二八六年頃）の言動を記したもので、甲の話の後半は乙の『莊子』（莊子の言行を記した書）の記事がもとになっている。ただし、甲は、乙の話の展開や考え方をすべて踏襲しているわけではない。なお、乙は漢文を書き下し文に改めたものである。これらを読んで後の問に答えなさい。（字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。）

甲

今は昔、震旦（しんたん）に莊子といふ人ありけり。心賢くして悟り広し。この人、道を行く間、沢の中に一（いっ）の鷺ありて、ものを **a** て立てり。莊子、**(1)** これを見て、窃（ひそか）に鷺を打たむと思ひて、杖を取りて近く寄るに、鷺逃げず。莊子、これを怪しみて、**A** 近く寄りて見れば、鷺、一（いっ）の蝦（えび）を食らはむとして立てるなりけり。然れば、人の打たむとするを知らざるなりと **b** ぬ。また、その鷺の食らはむとする蝦を見れば、**B** ずしてあり。これまた、一（いっ）の小さき虫を食らはむとして、鷺の **c** を知らず。その時に、莊子、杖を棄てて逃れて、心の内に思はく、「鷺・蝦、皆（え）、我を害せむとすることを知らずして、各々ほかを害せむことをのみ思ふ。**(f)** 我また、鷺を打たむとするに、**(g)** 我に優る者ありて、**(h)** 我を害せむとすることを **d** じ。然れば、**(2)** 如かじ、我逃げなむに」と思ひて、**(3)** 走り去りぬ。これ、賢きことなり。人かくの如く思ふべし。

また、莊子、妻（め）とともに水の上を見るに、水の上に大きな一（いっ）の魚浮かびて遊ぶ。妻、これを見て曰はく、「この魚、定めて心に喜ぶことあるべし。**(4)** 極めて遊ぶ」と。莊子、これを聞きて曰はく、**(5)** 「汝はいかで魚の心をば知れるぞ」と。妻答へて曰はく、「汝はいかで我が魚の心を知り知らずをば知れるぞ」と。その時に、莊子の曰はく、「魚に非ざれば魚の心を知らず。我に非ざれば我が心を知らず」と。**(6)** これ、賢きことなり。実（まこと）に親しといへども、人、ほかの心を知ることなし。然れば、莊子は妻も心賢く悟り深かりけりとなむ語り伝えたとや。

（『今昔物語集』による）

乙

莊子、^{*}濠梁[＊]の上に遊ぶ。莊子曰はく、「^{*}鯈魚[＊]、出でて遊びて從容⁽⁷⁾たり。是^{これ}、魚^{うを}樂しむなり」と。惠子曰はく、「子は魚に非ず。⁽⁸⁾安んぞ魚の樂しむを知らん」と。莊子曰はく、「^xは我に非ず。安んぞ^yの^zの樂しむを知らざるを知らん」と。惠子曰はく、「我は子に非ず。⁽⁹⁾固より子を知らず。子は固より魚に非ざるなり。子の魚の樂しむを知らざるは⁽¹⁰⁾全[＊]し」と。莊子曰はく、「請ふ、其の本に従はん。子の曰へる『安んぞ魚の樂しむを知らん』と云ふものは、⁽¹¹⁾既に已に吾之^{これ}を知るを知りて、我に問ひしなり。我、之を濠の上に知れり」と。

(『莊子』による)

注

* 震旦^{しんだん} || 中国のこと。

* 惠子 || 中国戦国時代の宰相。『莊子』に登場して莊子と会話を交わす。

* 濠梁 || 堀に水をせきとめて溜めたところ。

* 鯈魚 || 小魚の一種。

* 全^{まった}し || その通りである。

* 其の本に従はん || 話をもとに戻そう。

問一 空欄 a ～ d に入るべき語として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号をマークしなさい。

a イ 窺は □ 窺ひ ハ 窺ふ 二 窺へ

b イ 知ら □ 知り ハ 知る 二 知れ

c イ 窺は □ 窺ひ ハ 窺ふ 二 窺へ

d イ 知ら □ 知り ハ 知る 二 知れ

問二 傍線部 (1) が指示する事柄として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 一羽の鷺がなにものかを見つめている様子。

ロ 一羽の鷺をつかまえようとしている人がいる様子。

ハ 一羽の鷺の姿を描こうとしている人がいる様子。

ニ 一羽の鷺に誰かが食物を与えている様子。

問三 空欄 A に入るべき語として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ まちまち □ いよいよ ハ ゆめゆめ 二 さめざめ

問四 空欄 B に入るべき語を甲の本文から二字で抜き出して答えなさい。

問五 二重傍線部 (e) ～ (h) のうち、他とは異なる対象を指すものを一つ選び、記号をマークしなさい。

問六 傍線部 (2) の現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 自分が逃げても助からない

ロ 自分が逃げても許される

ハ 自分が逃げるのに付いてきてほしい

ニ 自分が逃げるのに越したことはない

問七 以下の文章は、傍線部(3)の理由を説明したものである。この文章について、次の問に答えなさい。

□C が □D の命を狙ううちに □E に命を狙われており、 □E が □C の命を狙ううちに □F に命を狙われて
いることに、 □C も □E も気づいていないことに気づいた □F は、 □G
□G
とに気づいたから。

(i) 空欄C～Fに入るべき語を次の中からそれぞれ選び、記号をマークしなさい。

イ 莊子 □ 鷲 ハ 蝦 ニ 虫

(ii) (i)で完成した前半部分の文章を参考にしながら、後半部分の空欄Gに入るべき文章を、三十字以上三十五字以内で答えなさい。

問八 傍線部(4)の文法上の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 推量 □ 意志 ハ 可能 ニ 適当

問九 傍線部(5)について、次の間に答えなさい。

(i) 「知れるぞ」を品詞分解するとどうなるか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 動詞＋完了の助動詞＋推量の助動詞＋助詞

ロ 動詞＋推量の助動詞＋完了の助動詞＋助詞

ハ 動詞＋推量の助動詞＋助詞

ニ 動詞＋完了の助動詞＋助詞

(ii) 現代語訳として、最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 君はどうやって魚の気持ちを知ったのか。

ロ 君には恐らく魚の気持ちがわかったはずだ。

ハ 君はどうして魚の気持ちを知りたかったのか。

ニ 君には魚の気持ちがかわかったのだね。

問十 傍線部(6)に言われる荘子の賢さを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 世の中には違う性格の人間がいることに思い至った。

ロ 妻の気持ちを尊重してこなかったことに思い至った。

ハ 人間の知には限界があることに思い至った。

ニ 自分以外の人や生き物に思いやりを持つのは難しいことに思い至った。

問十一 傍線部(7)について、次の間に答えなさい。

(i) 読みを平仮名(現代仮名遣い)で書きなさい。

(ii) 同じ意味を持つ熟語として、最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 夢中 口 堅実 ハ 無尽 ニ 自若

問十二 傍線部(8)の読みを平仮名(現代仮名遣い)で書きなさい。

問十三 空欄 x y z に入るべき語として、それぞれ最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 魚 口 我 ハ 子

問十四 傍線部(9)について、次の間に答えなさい。

(i) 読みを平仮名(現代仮名遣い)で書きなさい。

(ii) ここでの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 今後もずっと 口 言うまでもなく ハ 直接的には ニ 多少なりとも

問十五 以下は、傍線部(10)で肯定された結論とそれに達するまでの恵子の論法を図式化したものである。空欄 H・I に入るべき文をそれぞれ選択肢の中から選び、記号をマークしなさい。



イ 莊子は魚ではないから莊子には魚の気持ちがわからない。

口 恵子は魚ではないから恵子には魚の気持ちがわからない。

ハ 莊子は恵子ではないから莊子には恵子の気持ちがわからない。

ニ 恵子は莊子ではないから恵子には莊子の気持ちがわからない。

問十六 傍線部(II)は、恵子の論法に対し、莊子が、話をもとに戻すことを提案した上で、改めて恵子の「安んぞ魚の楽しむを知らん」という発言についての見解を述べたものである。次の間に答えなさい。

(i) 「之」が指すのはどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 恵子が主張したいこと

ロ 魚が楽しんでいること

ハ 魚の気持ち理解できないこと

ニ 莊子が魚ではないこと

(ii) 傍線部(II)は、どういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 魚の気持ちを理解できないことを私が理解していることを、君はすでにわかった上で、私に質問したのだ。

ロ 私が自分のことを魚とは思っていないことを、君はすでにわかった上で、私に質問したのだ。

ハ 私が魚の楽しい気持ちを理解していることを、君はすでにわかった上で、私に質問したのだ。

ニ 私が君の主張を理解していることを、君はすでにわかった上で、私に質問したのだ。

問十七 乙と甲の内容を対照させてその違いを説明した文章として適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 乙では、魚と人とで物事への理解度が異なることが述べられるが、甲では、どんな生き物でも生き物であれば物事に対する見方が共通していることが述べられる。

ロ 乙では、万物は一体であるという荘子の世界観が浮き彫りになるが、甲では、様々な生き物の思いを尊重すべきであるという荘子の考え方が浮き彫りになる。

ハ 乙では、荘子が他の生き物の心持ちを理解しうる人物として描かれるが、甲では、荘子が他の生き物には必ずしも理解が及ばないことを思い知る人物として描かれる。

ニ 乙では、生き物の種の違いを超えて理解し合える術が提示されるが、甲では、他の生き物が持つ危機感を自分も持つことで危険を回避する術が提示される。